廻り往還無之者は、來酉年暮より五ヶ年返上之趣に候事。

一、去未の年以來只今迄之知行當り之外過借用之分は、自分之知行當之內には立込不申、別に無利足にて、來酉年暮より五ヶ年返上之事。

但、他國并地廻り往還に付、知行當之分返上無之年は、右過借之分も返上御用捨之事。

右之通り來酉年より被仰付候旨被仰出候條、可得其意候事。

（寶暦元年）辛未十一月

會所裁許御貸銀、他國當り百石一貫目宛、地廻り六百目宛致借用、無利足にて五ヶ年之年賦を以返上之筈に候得共、御上御勝手御難澁至極にて可貸渡會所銀も拂底罷成候。右銀子皆御借り銀を以貸渡來候に付、是以後茂御借り銀を以可貸渡外無之候。依之來正月より借用之人々は、他國當は百石五百目充、地廻は三百目充、利足は一ヶ月百目に付五朱充之圖りを以、元銀之分は借用之翌年より五ヶ年之年賦を以返上、利足之分は毎歲年切に指上可申事。

一、當正月より今月廿九日迄、他國當り百石一貫目充、地廻當り六百目充借用之人々は、證文不相改內は、今年之證文之通無利足を以、來年より五ヶ年返上可仕事。

但、來正月以後證文相改候者は、其改候月より、百目に付一ヶ月五朱充之加利足、返上可仕事。

一、御切米等被下候人々は、他國當り三百目、地廻當二百目、利足等右同前之事。

右之通來戌正月より相改候條、可被得其意候事。

（寶暦三年）癸酉十二月

會所裁許御貸銀之儀に付、別紙之趣被得其意、組・支配之人々に被申渡、尤同役中可有傳達候。以上。

（寶暦三年）十二月廿四日　本多安房守

二九　役銀・出銀・內々拜借銀之外諸上納延期之儀觸

御家中之面々儉約之儀、前々より被仰出、近年御貸銀等被仰付候得共、二三年米下直、其上才覺銀等も差支候に付、一統勝手難澁之躰粗相聞候。仍之格別之趣を以、今年分役・出銀并御內々より拜借銀之外、當七月より十二月迄之諸上納銀、并今年分御貸銀方除知・除米御用捨被成候條、被得其意、組・支配之面々に可被申渡候。左候得ば、尙更勝手取續之儀精誠遂勘略、不埒之筋無之樣嚴重に可被申渡候。會所銀・聖堂銀等借用之人々、右利足銀は御定之通差上可申候。

右之趣被申渡候上、今年分上納銀高・除知除米高・人々交名、一組切帳面に記差出可被申候事。

（寶暦四年）甲戌七月

朱書。同四年七月十一日御用番奥村主水殿被仰渡。

三〇　銀札發行一卷

御家中諸士勝手及困窮、勤仕にも相障可申躰に付、種々被遂御僉議、御代々御例は無之候得共、御領國之內銀札遣被仰付候ば、御家中并町・在共勝手に相成、諸商買通用にも宜趣に付、右札遣被仰付、其上を以御救も被仰付候ば可然段、御僉議御治定にて、則公儀に御伺被成候所、銀札遣之儀御伺之通被仰渡候。依之御領國中銀札遣被仰付、追而仕法等之趣可被仰渡候。先一統爲承知、夫々可被申聞置事。

（寶暦五年）四月十五日

朱書。同五年乙亥御用番本多安房守殿被仰渡。

御領國銀札遣被仰付候段、先達而申渡通に候。右札早速出來兼候付而、當分爲續假札を以百石五百目宛、御步並・御切米被下候者へは二百五十目充、御貸渡被成候事。

一、右銀札、於御貸銀所頭・支配人に迄可相渡候。何日可相渡段は、主付役人より直に可申談事。

一、當收納、地米之外先拂申間敷候。百石以下皆地米之人々、三の一之外は拂申間敷候。拂候時節之儀は追而可申渡事。

一、右之通本札出來迄、先當分百石五百目充、爲續御貸渡候得共、收納米も拂不申儀に候條、借銀・買懸銀之儀は先及貪着申間敷候。尤町方にも町奉行より申渡筈に候事。

一、町方・御郡方商賣入用引替可申ため、札座にも銀札相渡可申候條、來月朔日より勝手次第引替可申事。

一、銀札仕法之儀、別紙之通之事。

右之趣被得其意、組・支配之面々に可被申渡候。組等之內